

〔翻刻〕

刈谷市立図書館村上文庫蔵「伊勢物語髓脳」(1)

飯塚 恵理人
蛭江 ゆき
米田 真理

解題

「伊勢物語髓脳」は、伊勢物語の古注釈の一つである。この書の特徴は、古注釈の中でも「男女の和合の功德」が「悟り」に直結すると説く点にある。「伊勢物語髓脳」がこの特徴を持つ背景について、片桐洋一¹⁾氏は、

真言立川流の立場に立った「伊勢物語」秘伝書というよりも、多くの読者を持つ「伊勢物語」によって真言立川流を説こうとしているかに見える「伊勢物語髓脳」の成立基盤も、文観の周辺、あるいは文観の影響を著しく受けた人々の世界に求められるのではないか。

と、この書が真言立川流の影響を色濃く受けていることを指摘されている。このような理由から、片桐氏は、この書の成立を文観の影響の大きかった建武以後(一二三三四)の南北朝時代から室町時代

と考えておられる。「伊勢物語髓脳」は、この時代の業平観・「伊勢物語」観を考える上で大変参考となる。「謡曲集上」³⁾の「杜若」の頭注に伊藤正義氏が引用されているように、この書は謡曲の典故としても注目されるものである。

「伊勢物語髓脳」の伝本は、『国書総目録』⁴⁾に、国会・内閣・九大・名大(皇学)・刈谷・神宮・桃園の七箇所⁵⁾の所蔵が記載されている。『国書総目録』によれば、神宮文庫には、宮崎文庫蔵承応二年写本と林崎文庫蔵天明三年写本の二本があり、阿古根浦口伝のみの部分的な写本が一本ある。また、九州大学図書館には、「古今和歌集灌頂口伝」の「合」として載せられている本と、「伊勢物語評註」の「付」として載せられている本の二つがある。大津有一³⁾氏が「九大図書館蔵本」とされたのは前者であり、本稿ではこの本を「九州大学図書館蔵本」と呼ぶ。大津氏はまた、上野図書館蔵本を紹介している。また片桐氏により、鉄心斎文庫蔵の衣笠文庫旧蔵本・弘安五年奥書本、東北大学蔵本が紹介されている。完全な写本としては以上十三

本が現在所在を知られていることとなる。

この「伊勢物語髓脳」の写本は、二系統に分かれる。この系統分類を最初に行ったのは大津有一氏⁽⁸⁾である。(国会図書館蔵本・名古屋大学蔵本・東北大学蔵本・鉄心斎文庫蔵の衣笠文庫旧蔵本及び弘安五年奥書本・九州大学図書館蔵の「伊勢物語評註」に付載されている本は対象とされていない。)大津氏は、

ア、内閣文庫蔵本・上野図書館蔵本・神宮文庫蔵本(林崎文庫・天明三年写)・九州大学図書館蔵本

イ、桃園文庫蔵本・刈谷図書館蔵本・神宮文庫蔵本(宮崎文庫・承応二年写)

と分類された。(ア、イは便宜的に飯塚が付した。また神宮文庫蔵本の所蔵文庫名・年記も飯塚が付した。)大津氏が、この系統を分ける基準とされた最も大きい相違点は、

内閣文庫蔵本・上野図書館蔵本・神宮文庫蔵本・九大図書館蔵本はいづれも譬へば内閣文庫蔵本の例でいふと、阿古根浦口伝の地神五代の説明

此五の物も又おのく死する事なきによつて、がうして今かみをまとひてあれどもおのくはなれて、火ははいにかへり、水は水にかへり、土はつちにかへり、風はかせにかへる時死するとは云なり。

までであるが、神宮文庫蔵承応二年写本・刈谷図書館蔵本・桃園文庫蔵本は更に世継の本文とか、朱雀院の注とか、長能の私記とかを挙げて、尚奥書をも加へてゐるのである。

と、アの系統の諸本が「阿古根浦口伝」の地神五代の説明までであるのに対して、イの系統の諸本がそれ以降も続けて本文を持つことである。なお、片桐氏は、大津氏の分類に従い、さらに東北大学蔵

本・国会図書館蔵本をアの系統に、鉄心斎文庫蔵衣笠文庫旧蔵本・鉄心斎文庫蔵弘安五年奥書本をイの系統に分類された。九州大学図書館蔵の「伊勢物語評註」に付載されている本及び名古屋大学蔵本は未見であり、系統は不明である。

このア・イの系統のどちらが本来的であるのかについて、片桐氏は、

末尾の部分の存する方が本来の形であるのか、また存しない方が古い形なのか、にわかに判断することは出来ない。常識的な見方からすれば、奥書の部分まで揃っている系統の方がより完全であるかに思われるが、「研究篇」において述べたように、この髓脳自体が、総論と深秘七箇条で一往終つた後に「伊勢二門極理灌頂撰、阿古根浦口伝」が続き、その補充ともいふべき形で刈谷本その他にのみ見られるこの末尾部分が存するといふ、いわば、増補に増補を重ねるといふような形態をとっていることを考えれば、いずれをよしも断定しかねるものを覚えるのである。

と、いずれを本来的ともされていない。「伊勢物語髓脳」を用いる際には、どちらが本来的とも言えないこの二系統の中があることを認識しておく必要があるだろう。

このうち、アの系統に属する本では、神宮文庫蔵林崎文庫蔵本の翻刻が『伊勢物語の研究(資料篇)』に所収されている。イの系統に属する本では刈谷図書館蔵本(以下「刈谷本」と略称する)が『未刊国文古注釈大系』(以下「未刊」と略称する)に翻刻されている。但し、この「未刊」の本文は、その解題に

本書は刈谷町立図書館蔵本(村上忠順旧蔵)を底本として、神宮文庫蔵一本(承応二年写・天明三年写)、内閣文庫蔵本、帝

国図書館蔵本(不忍文庫旧蔵)等を参照したものである。

とあるように、純粹に「刈谷本」の本文によるのではなく、他の本との混合本文となっている。このため、純粹なイの系統の本文は未翻刻であるといつてよい。

そこで、今度、刈谷市立図書館の御好意で、翻刻の許可がいただけたので、これを翻刻して発表することとした。また、これを底本として、校本を作成することにした。現存諸本全ての校本を作ることでできれば一番良いのだが、容易ではない。そこで、両系統の本文を概観する目的をもって、対校本に刈谷本と系統の異なる林崎文庫蔵本を選んだ。また、刈谷本の系統の中での異文の中を考えるため、対校本としてもう一本、現存諸本の中で最も古く、刈谷本と同じ系統で最善本と考えられる鉄心斎文庫蔵弘安五年奥書本を選んだ。校本はこの三本で作成することにした。諸本の調査は今後の継続課題としたい。

林崎文庫蔵本は『伊勢物語の研究(資料篇)』(前掲)に翻刻されているものを、鉄心斎文庫蔵弘安五年奥書本は『鉄心斎文庫蔵 伊勢物語古注釈叢刊 二』に影印で出版されているものを、片桐氏の本により、校異につけさせていただいた。(鉄心斎文庫蔵弘安五年奥書本は、『伊勢物語髓脳』の識語までの本来の部分に「口訣」「系図」「万葉集歌」「古仙抄歌」が加わっている。これは増補の部分と考えられるので、校異にはつけないこととする。)

「刈谷本」の「伊勢物語髓脳」は、以下のような構成となっている。

- 一、〔書題〕
- 二、〔総論〕
 - 1、「伊勢の功德」を知らせる意味
 - 2、「伊勢」は和合を意味すること

3、義晴(滋春)が業平の悟りを知ること

4、「伊勢物語」が「和合」の物語であること

三、「業平が臨終の際に有常娘の極楽往生を約束したこと」

四、「深秘第一、和合と悟り」

五、「深秘第二、「悟りの人」が「迷へる女」と和合する意味」

六、「深秘第三、迷ひの心と悟りの心が一体化する意味」

七、「深秘第四、悟りの時、和合であるから「迷ひ」もない…業平と染殿内侍」

八、「深秘第五、無相無念とは…業平の斎宮への歌、義晴(滋春)の業平葬儀の時の歌」

九、「深秘第六、悟りの時、皆和合であるから善悪の区別はない」

十、「深秘第七、住吉大明神を血脈の始めとすること」

十一、「千葉破」ということ

十二、「伊勢二門 極理灌頂撰 阿古根浦口伝」

1、「千葉破」の意味

2、「我心こそ神」であること

3、業平の悟りと神との関係

4、義晴(滋春)の悟り

十二、「伊勢二門 極理灌頂撰 阿古根浦口伝」

1、業平が住吉明神に重んじられたこと

2、業平が住吉明神より「阿古根浦口伝」を伝授されたこと

3、業平の返歌の意味

4、「伊勢」の意味

5、「秋津島」の起源と天神七代・地神五代

6、天神七代・地神五代とは

7、6項の地神五代に関する説への反論

8、「世継」に記された伊弉册・伊弉諾

9、「朱雀院註」の伊弉諾・伊弉冊

10、齋宮の起源

11、結び―業平の恩

十三、〔識語〕

本年度は、十〔深秘第七、住吉大明神を血脈の始めとすること〕までを翻刻し、それ以降を次年度とする。

解題・凡例・「刈谷本」の下読みは飯塚が、「鉄心齋文庫蔵弘安五年奥書本」の下読みは蛭江が、校異凡例・校異の調査は米田がそれぞれ担当した。その後全員で互いの原稿を検討した。本稿の責任は三人が負うものとする。なお誤りもあるかも知れない。御教示いただければ幸いである。

〔凡 例〕

1、底本は、愛知県刈谷市立刈谷図書館村上文庫本「伊勢物語髓脳」を用いた。

2、校異は以下の二本について、片桐氏の本によって付した。

林―神宮文庫蔵林崎文庫蔵本（十二・7以降の本文を欠く。）

『伊勢物語の研究〔資料篇〕』片桐洋一著 昭和四四年一月

発行 明治書院 四四五―四五九頁

鉄―鉄心齋文庫蔵弘安五年奥書本（口訣）「系図」「万葉集歌」「古

仙抄歌」を校異の対象から除く。）

『鉄心齋文庫蔵 伊勢物語古注釈叢刊 二二 片桐洋一 芹沢

新一 平成元年一月発行 八木書店 三九九―四四七頁

3、送り仮名、漢字・ひら仮名・片カナ等の表記の違いは残した。

4、底本の旧字体は原則として新字体に改めた。

5、清濁の表記は底本のままとした。

6、底本には句読点がない。意味上の区切りに、飯塚が私に「」を付した。

7、底本のルビ・注記は（ ）を付けずに記した。誤字と推定される場合、飯塚が私に注を加えたものは、その右傍に（ ）付きで注した。

〔校異凡例〕

校異の形式は以下のようなものである。

a、「刈谷本」と対校本文との表現が異なっている場合、両方の本文を挙げる。

〔刈谷本〕「……」―〔対校本〕「***」

b、「刈谷本」にある語が対校本文にない場合、刈谷本の本文を挙げる。

〔刈谷本〕「……」―〔対校本〕ナシ

①表記の差と考えられるものは原則として校異に挙げない。但し、「刈谷本」で仮名書きされており、意味のとりにくい語句で、他の本に漢字で示されているときには、校異とは区別せずに載せた。

②「林崎文庫蔵本」と「鉄心齋文庫蔵弘安五年奥書本」が同文で表記の異なる場合は、（林・鉄）とし、「林崎文庫蔵本」の表記を記した。

③「林崎文庫蔵本」の傍注は校異とはしなかった。但し、本文中、（ ）を用いて補われている文字がある場合は、そのまま転記した。

一、〔書 題〕

伊勢物語髓脳

右近中将在原朝臣義晴謹書¹

〔校異〕

- 1 右近―(林)左近権 2 義晴―(林・鉄)滋春 3 書―(林・鉄)序

二、〔総論〕

(1)、「伊勢の功德」を知らせる意味

夫、人躰をうけ、我あきつしまに生れて、天地開けて、日月をみそなハし侍るおこりを尋ぬれば、た、たかまの里より天降り、たちをのほこの露、たちちめのうミのほとりにかたちをやとして、終にちハやふりていてしをはしめとせり、是をおもへハ、迷ひもなく、さとりもなかりけるに、よしなくみなもとを忘れて、あかしの浦のあり明の月をたもにかけさりけることハ、みな伊勢のふたつよりおこりて、しるとしらするとハかりなり、しる人ハ、いやましくとくをまし、しらする人ハ、いやましにふかきさかいにおもむく、しかるにしやうしのさとにいてたいしやうのくるまのこの輪にふかくめぐりて、まことの門にいたらさることかなしきかな、あるひハ久かたのあまのくに、生れて、又そこより底にしつミ、あるひハまなきけふりにきえはて、或ハ、くもはやしの花をなかめて、ほしのくらるにいゑるをしたりといへとも、いまたこの伊勢のふたつよりむまれて、伊勢のくどくをしらす、

〔校異〕

- 1 うけ―(林)うけて 2 生れて―(林)生出て 3 天地開けて―(林)あめつちひらけ 4 みそなハし侍る―(林)みそなはし、 5 おこり―(鉄)そのおこり 6 たかまの里より天降り―(林)玉皇よりあひくだりて (鉄)たかまの里より天くたりて 7 露―(林)つゆにかけをやどして 8 たちちめの―(鉄)たら

ちめ 9 ほとりに―(林)いほりに 10 やとして―(鉄)やとし

- 11 ちハやふりて―(林)ちはやぶり 12 迷ひ―(林)まどひ 13 よしなく―(林)よしなきをくりに 14 忘れて―(林)わすれ 15 かけさりける―(林)うけざりける (鉄)かけける 16 みな―(林)はみな 17 ふたつよりおこりて―(鉄)二より奥りて 18 くとく―(林)ほとけのくどく 19 ふかきさかいにおもむく―(林)わろささかひにをもむきて 20 にいて―(林)を出て (鉄)をいて 21 たいしやうのくるま―(林)おぐるま (鉄)大小の車 22 この輪に―(林)このわの 23 にいたらさること―(林)を出ざる事の (鉄)にいらさること 24 かなしきかな―(林)かなしき也 (鉄)なしき哉「な」の上に「か」の書き添えあり 25 あまのくに、―(林)天(に)して(こ)のくに、 26 けふりにきえはて―(林)けふりときえはてぬ。しかるも、これはまことのみにちにおこらずして、いたづらにたよりなし。(鉄)けふりに消はてぬ 27 くもはやしの花をなかめて―(林)雲のはやしの花をながめて (鉄)雲林の花を詠て 28 いゑるをしたり―(林)いへいをしめたり (鉄)家ゑにしたり 29 ふたつよりむまれて―(林)二より生じて (鉄)二より生れて 30 伊勢のくどくを―(林)また伊せのくどくをも

(2)、「伊勢」は和合を意味すること

またいせのふたつハ、有にもあらず、なきにもあらず、色もなく、心もなきなり、ひとつにして、ひとつにもあらず、伊なくしてハ、勢もなし、伊勢のふたつハふたつなり、ふたつとしはらくいへるハ、まよへる人をして、ひとつのさとりにいれんかためなり、ひとつと云は、さとり人をして、まことのことハりをしらせんかためなり、万そうみな伊勢なれハ、まむそうならへてひとつ也、伊勢と云ハ男

女なり、なんによの名をたてたり、た、てんかまんさうみなひとつ
和合なり、伊勢と云は和合ひとつの名なり、

〔校異〕

1 有にもー(林) あるに 2 なきにもー(林) なきに (鉄) 無
にも 3 色もー(林) 色 4 心もなきなりー(林) 心なくなりに
けり 5 ひとつにして、ひとつにもあらずー(林) 一にして、ふ
たつにあらず。二つにして、ひとつにあらず。(鉄) 一にして一に
もあらず 6 伊勢のふたつハふたつなり、ふたつとしハらくいへ
るハー(林) 勢なくしては、伊もなし。ふたつは、ふたつなりとい
へども、しばらく (鉄) 伊勢の二ハ二なり二としはらくいへるハ
7 まよへる人ー(林) まよふ人 8 ひとつのー(鉄) 一の 9
いれんー(林) いらしめむ 10 さとる人をして、まことのことハ
りをー(林) さとりの人をして、真の理を (鉄) 悟人をして実のこ
とハりを 11 しらせんー(林) しらしめむ 12 ならへてひとつ
也ー(林) みな一となりぬ 13 伊勢と云ハー(林) いせといつは
(鉄) 又伊勢といふハ 14 なんによの名をたてたりー(林) 名にわ
かつことはよろしくまよひのため也。只和合によりて、おとこ・女
の二の名をたてたり。(鉄) 男女の名をたてたり 15 てんかー(林)
天下の 16 ひとつ和合なりー(鉄) 一和合也 17 和合ひとつの
名なりー(林) ひとつの名にて有也。(鉄) 和合一の名也
(3、義晴〔滋春〕が業平の悟りを知ること)
幸に、今、此しきしまにむまれて、よしハるも、また伊勢のこのさ
とりを得ことうれしきかな、あハれなるかな、そのさとりのつなを
うちはへて、末の世にくるをなり、まよひの闇をひるかへして、み
れハ、いさなきいさなきのたねをまき、たねをおさめし古しへのあ
こねのうらのなみひろく、素盞尾尊のこと葉をなかくつたはり、み

もすそ川のみな上たえす、伊勢ふたつのミやはしらたてしより、住
吉の神さひたりし松の葉ハちりうする事なく、みとりふかく、いや
ましにさかへて、此さとりを得たる事、在原の業平、我たらち
なり、其なかれ絶えせねハ、おもふ事いはてやと、いさめし言の葉
のしたに、我またしる事なり、されハ、たらちをハ、なとりの位
にそなハリまし／＼て、おもひおもはぬけちめをうしなひて、よし
あしのさかひをへたてす、いつきのミヤの、世をのかれし時ハ、い
ろもなく、心もなくなかめをおこし、若紫のふかききりをのこし
てハ、くらきにきはまりぬとのたまひたりけるなるへし、しかのミ
ならず、みすもあらずといふハ、ふたつなきこと葉をおしへたり、

〔校異〕

1 幸にー(林) 幸 2 しきしまー(林) しましま 3 よしハる
ー(林) 鉄 しげはる 4 このさとりを得ことー(林) 二のさと
りをうること (鉄) 二の悟をうること 5 うれしきー(林) よろこ
ばしき 6 かなー(林) かなや 7 さとりー(林) おほへ (鉄)
悟 8 末の世ー(鉄) すゑに世(但し「に」の右に「ノ」の書き
添えがある。) 9 をなりー(林) ことなく、三界の衆生生死長夜
の (鉄) と也 10 みれハー(林) はる／＼むかしをたづねみれば、
天のわかみこ・下照姫・ 11 いさなきのー(林) 伊弉册 12 な
ミー(林) めぐみのなみ 13 こと葉をー(林) ことばは (鉄) こ
と葉 14 つたはりー(林) つたはりて 15 みもすそ川のー(林)
ならのみかどのみもすそ川はきよきとくをうつして五十鈴川の
(鉄) みもすそ川の清きなかれをくみて五十鈴川の 16 たえすー
(林) たえば 17 伊勢ふたつのー(林) いせの二つ (の) (鉄) い
せの二の 18 ミやはしらー(林) 鉄 宮ばしらを 19 たてしよ
りー(鉄) たてしたてしより 20 神ー(鉄) 祢 (誤字か?) 21

松の葉ハ―(林) 松のは 22 みとりふかく―(鉄) ふかく 23 いやましに―(林) いや〜年 24 さとりを得たる―(林) さとりをうる (鉄) 悟を得たる 25 在原の―(鉄) 在原 26 我たらちとなり―(林) わがたらちお也 (鉄) はかたらちおなり 27 言の葉―(鉄) かとのは 28 なとりの位―(林) さとり一位 (鉄) 覚の位 29 そなハリまし〜て―(林) そなはりて 30 おもひおもはぬ―(林) 死して思ふおもはぬ (鉄) 思ひ思ぬ「ぬ」の上に「ハ」の書き添えあり 31 けちめをうしなひて―(林) けぢ(め) して、ながしうしなひて 32 へたてす―(林) たてず 33 いつきのミヤの―(林) いつきのみや 34 いろもなく、心もなく―(林) ふたつもなし、心も(と) なき 35 おこし―(林) 残し (鉄) ナシ 36 のこしてハ―(鉄) 残して 37 きはまりぬ―(林・鉄) ゆかず 38 みすもあらずといふハ―(林) みずもあらずといふては、しるしらぬこと葉も 39 ふたつなきこと葉―(林) 二なきこととは (鉄) 二なきこととは

(4、「伊勢物語」が「和合」の物語であること)

そも〜、此伊勢物語と云ハ、和合の物かたりなり、和合のひとつを、よろつこと葉と、まよひのまへにはみれとも、しる人の前にハ、た、ひとつ和合にして有なり、唯、是、しる人の、しらざる人をして、すくハんかためなり、是をまことの伊勢のふたつのまなひ心さしのゆくもとののそみにてあるへし、此伊勢、わかもとよりひとつ和合なり、きたる事もなければ、さる事もなし、色も心も、まことの躰なければ、むさう無ねんなりと云へるなるへし、此ゆへを、今、よしはる、むかしの事を思ひ、ミつから心をめくらして、たちをのしるしのこせるふしをとふらひおける言葉をあらぬところなり、

〔校異〕

1 和合の―(林) わがう 2 和合のひとつを―(林) わがうひとつの (鉄) 和合ひとつを 3 こと葉と―(林) ゆうはの (鉄) ことのはに 4 ひとつ和合にして―(林) わがうひとつにて (鉄) 一拾にて「拾」の右に「ワカウ」とルビあり。「和」と「合」の合字らしい。 5 なり―(林) に (鉄) ナシ 6 ふたつのまなひ―(林) 二のまなみ (鉄) 二のまなひ 7 伊勢―(林・鉄) いせは 8 わか―(林・鉄) ナシ 9 ひとつ和合―(鉄) 一和合 10 なり、きたる事も―(林) なりけり。これはなり□せのことばにはうせざりけり。きたる事 11 さる事もなし、色も心も、まことの躰なければ―(林) さる事なし。色も心も、実躰也ければ、これを (鉄) 是を 12 なりと云へる―(林) といふ 13 ゆへを―(林・鉄) 故に 14 よしはる―(林・鉄) ありはらのしげはる 15 ミつから―(林) みづからの 16 たらちを―(林) たらちね 17 ふしをとふらひおける言葉をあらぬところなり―(林) ゆふはをうけて、わづかに七かでの髓脳をえらぶるところなるべし (鉄) ふしをとふらひいひをけること葉をうけてわづかに七ヶ条の髓脳をえらぶところなり

三、「業平が臨終の際に有常娘の極楽往生を約束したこと」

一 ち、業平朝臣、元慶四年五月廿七日の夜半にいたりて、すでに心よハけにみえしとき、在常の女、枕によりて、かほをあはせて、かなしみのなミたをなかしはいはく、我君うせなん後ハ、おもひの闇にまよふて、さためてツミふかき道におもむきて、くらきよりくらきにいたりなんといへるに、よめる、

しるやきみ我になれぬるよの人の

くらきにゆかぬたよりありせは¹¹

是ハ、伊勢のまことのさとりのおもむき、ち¹²に伊勢物語をかきたまへるこ、ろさし、けとりしやうのためなり、さとれる業平にあひぬる、世の人ハ、ヤミにたとらず、まことの道に縁を結ぶことをハしらぬかと、よまれたるなり、おそらくハ、よしはる此多いひとつをまことのおしへにゑたり、これ、ハ¹³かりゆうに、伊勢物かたりをつたへん人ハ、まつ我ち、業平のゑいさうをたもつへし、そのさうは、ゑほしひた、れに、あをきぬをきせたり、是さいこの夜半のすかたなり、此うたをかきて、枕のうへに若むらさきの女をかくへし、此時まことの伊勢のさとりまなこにあらはれたるかゆへに、この伊勢ハ和合の名なり、た、ひとつ和合にして、し¹⁴はらく男女とふたつの名をつけたり、和合、元来¹⁵の名なり、和合の時、ふたつの物、ひとつに乱れあひて、ひとつとなるなり、

〔校異〕

1 一 ち、業平朝臣(林) 一、ち、なりひらの朝臣 2 廿七日の(林・鉄) 廿七日 3 在常の女(鉄) 有常か娘 4 かなし(林) かなしび (鉄) 悲 5 我(林) ナシ 6 まよふて(林) まよひて (鉄) 迷て 7 さためてつみふかき道におもむきて(林) ナシ 8 いたりなんといへるに(林) 入なむとみゆるに 9 よめる(林・鉄) よめる哥 10 しるやきみ(林) しぬるあいだは 11 せは(林・鉄) とは 12 さとりのおもむき、ちに(林) さとりのをもむき、ち、の (鉄) 悟の趣父 13 かき(林) かきをき (鉄) 書 14 こ、ろさし、けとりしやうの(林) こ、ろざしは、これ化度りしやうの 15 さとれる(林) さとる 16 世の人ハ(林) せけんの人ハ (鉄) 世の中の人ハ 17 まことの道に縁を結ぶことをハしらぬかと(林) まことのみ

ちにえんをむすび、しらぬが、やみにたどらむずらむと (鉄) 実の道に縁をむすふことをはしらぬかと 18 よしはる(林・鉄) しげはる 19 ゑいひとつをまことの(林) うた一をまことの (鉄) 詠一を実の 20 これ、ハかりゆうに(林) これ、わがながれに (鉄) 是我流に 21 我ち、業平の(林) われ、なりひらが 22 ゑいさう(林) 影像 (鉄) 影像 (但し「ヤウサウ」のルビあり) 23 さう(林) かたち (鉄) 像 24 ひた、れ(林) なをし 25 あをきぬを(林) あをきぬ (鉄) 青ききぬを 26 かきて(鉄) 書て 27 かくへし、此時まことの(林) かきふし、此時まことの (鉄) かくへし此時実の 28 さとりまなこにあらはれたるか(林) さとりのまなこあらはれたる (鉄) 覚まなこにあらはれたるか 29 ひとつ和合(鉄) 一和合 30 にして(林) にて 31 しはらく(林) よろしく 32 とふたつの名(林) の二名 (鉄) と二の名 33 元来の名なり(林) もとより此名也けり (鉄) 元来の名なりけり 34 ふたつの(林・鉄) 二の 35 ひとつに(林) 一つに (鉄) 一に 36 乱れあひて(林) みだれあふて 37 ひとつと(林・鉄) 一と

四、〔深秘第一、和合と悟り〕

一 しんひたいの第一¹にはいはいはく、なんによそうくわいの時、ともにゆふうふしてたかひに一念を生ずる、このかうしやうの心、則こ²うをむすひて、ともにさとる時ハ、いよ³ふつようをほとこす、唯⁴さとりの人ハ、和合する時、閉開たかひにひとつとなりて、五行四⁵大心、あひともにゆとうして、二⁶にんのふたつのねんく⁷よしとしやうつうして、一念生るなり、かうしやうの時、さとりのひと⁸おもふへし、このかうしやうハ、是、わかしやうにあらす、人のかうし

うにもあらず、天下万象、五行四大、みなく伊勢なり、ざるを、われハさとり、人ハまよひ、しるとしらざるとハかりなり、今和合の時、まよひの心、ねんなくして、さとりもまよひも、よしとおもへる一念を、和合しかうしやうす、もとよりミな和合なれハ、此和合の時、さとり心ひとつになり、通しかうしやうする時ハもとよりなく、伊勢ほんしやうしやうの和合なり、まよへる心、さとれる心、ひとつになして、佛のたねをささし、まことのさとりにゑんをむすふなり、是、しんしつの伊勢のすいなうなり、

〔校異〕

- 1 一 しんひたいの第一にはくー(林) 深秘第一云 (鉄) 秘々第一に云 2 なんによー(林) おとこをんな (鉄) 男女 3 そくくわいー(林) きうくはひ (鉄) 交會 4 ゆふうふー(林) ゆふえん (鉄) 融同 5 一念を生ずる、このかうしやうの心、則ちこうをむすひてー(林) 一ねん合成す。此がうしやうのころ、すなはちきようをむすぶ。ともにまよふときは、りんゑのきようをむすぶ。(鉄) 一念を合成の時業を結び共にまよふ時ハともに輪廻のこうを結ふ 6 ふつようー(林) ほとけの用 7 さとりの人ハー(林) さとる人は、まよふ人に (鉄) 覚人と迷人と 8 ひとつとなりてー(林) ひとつとなる。(鉄) 一となりて 9 五行四大心ー(林) 五行四大のころ 10 あひとつもにー(鉄) 相共に 11 ゆとうー(林) ゆふえむ (鉄) 融同 12 二にんのふたつのねんくよしとしやうつうして、一念生るなりー(林) ふたりの一々のおもひによしとなる□うして、一ねむをがうしやうする也。(鉄) 二人のこの念々吉と成通して一念を 13 かうしやうのー(林) このがうしやうの 14 さとりのひとー(林) さとりの人(と) (鉄) 覚人 15 しゃうー(林・鉄) 合成 16 人のかうしうにもあらず

- ー(林) ナシ (鉄) 人の合成にもあらず 17 みなくー(林・鉄) 皆 18 さとりー(鉄) さとる 19 まよひ、しるとしらざるとハかりなり、今和合の時ー(林) まよへり。しるとしらざるとばかりなり。今和合の時、(鉄) ま(但し、傍に「よひしるとしらざるとはかりなりいまわかうのとさま」と書き添えがある。) 20 まよひの心、ねんー(林) 此まよふ心、他念 (鉄) よひの心地念 21 さとりもまよひもー(林・鉄) さとるもまよふも 22 和合しー(鉄) 和合して 23 さとり心ー(林) さとる心に (鉄) 覚心 24 ひとつにー(鉄) 一に 25 通しー(林) つうじて (鉄) 通して 26 なくー(林) 也 27 伊勢ほんしやうしやうー(林) いせのほんうしやううちう (鉄) いせの本有常住 28 和合なりー(林) わがうとなるなり 29 さとれるー(林・鉄) さとりの 30 ひとつになしてー(林) ひとつになりて (鉄) 一になして 31 まことのー(鉄) 実の 32 伊勢のー(林) 伊勢

五、〔深秘第二、「悟りの人」が「迷へる女」と和合する意味〕

一 しんひたい第二にはく、さとりの人、和合の時、おもへ、この和合ハ、これ天下の万象、ミな和合にて有なり、ちしやうしやうしやうの和合なり、此和合ハ、みな佛なり、さとりを得時の和合ハ、ほとけのようをほとこし、しゆしをあらハすなり、佛躰をしやうしゆするしゆしといふハ、これもいんなり、このいん佛の躰をしやうしゆするなり、これハけと利生のためなり、ほとけ出給ふとおもへハ、まんさうといふハ十かいなり、十かいといふハ、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天・聲聞・縁覚・菩薩・佛なり、此十界皆和合なり、さとりのほさつ、仏も是和合なり、まよへるちこく・餓鬼・畜生・三界・六道鳥獸までもこの和合の時、た、ひとつにみられたり、

かうしやうする時ハ、さとり心の心・まよひの心ひとつになるなり、ふつしゆをささし、まことのさとりにけちゑんして、さとりをうるなり、これもむさのけと利やくといふなり、されハさとれる人ハまよへる女に和合して、このくわねんをなして、和合のときゆとう、かうしやうして、此一ねんをなす、まよへる女さとり心の心にひとつになりて、終に悟の縁を結び、悪道にゆかぬなり、

〔校異〕

- 1 一 しんひたい第二にいはく、さとりの人―(林) 深秘第三云、さとりの人 (鉄) 深秘第三云覚の人 2 和合の時、おもへ―(林) 和合の時、思へり (鉄) 和合時を 3 天下の万象―(鉄) 天下万象 4 にて―(鉄) して 5 ちしやうしやうしやう―(林) 此わがうは、自ら清淨 (鉄) 自性清淨 6 和合ハ―(林) わがう 7 さとりを得―(林) さとりをえぬ (鉄) 覚をうる 8 しゆしをあからハすなり、佛躰をしやうしゆするしゆしといふハ―(林) 種子は仏躰をじやうじゆす。種子といふは (鉄) 種をあらハす也仏躰を成就する種子と云は 9 これも―(林) これ (鉄) ナシ 10 このいん―(林) 此るんは (鉄) ナシ 11 佛の躰―(林) 仏躰 12 しやうしゆする―(林) 生ずる (鉄) 成する 13 これハけと利生のためなり、ほとけ出給ふとおもへハ―(林) けどりしやうのほとけ世に出給ふと思へり (鉄) これハ化度利生のためにほとけいて給ふと思へ 14 十かいと―(鉄) ナシ 15 人・天―(林) にんげん・天上 16 佛―(林) 仏果 17 此十界皆和合なり、さとりのはさつ、仏も是和合なり、まよへるちこく―(林) この十かいみなわがうし、まよへる。ぢごく 18 六道―(林) 六だうのまよひの 19 この―(林) みなこの 20 ひとつにみたれたり―(林) ひとつにみだれあふ也。一念を (鉄) ひとつつてみのあひたり 21 なる

なり―(林) なり (鉄) 成也 22 まことの―(鉄) 実の 23 さとり―(鉄) 悟 24 これもむさのけと利やくといふなり―(林) 是をむさうのげど、いふ也 (鉄) 是を無佐の化度利益と云也 25 さとれる―(林) さとりの 26 女に―(林) 女の 27 くわねん―(林) くはんねん (鉄) 観念 28 ゆとう、かうしやう―(林) ゆうえん (鉄) 融同合成 29 此一ねんをなす―(林) このとき一念合成すれば 30 さとりの―(鉄) 覚の 31 ひとつに―(鉄) 一に 32 悟の―(林) さとりに (鉄) 覚の 33 結び―(林) むすびて 34 悪道にゆかぬ―(林) あしきみちにゆかざる

六、〔深秘第三、迷ひの心と悟りの心が一体化する意味〕

一 しんひたい三にいはく、さとりの人、和合の時、たかひにこく、しやうする時、ひたりの手の指を以て、女のむねのうへに、伊勢和合いつかくとかく、これハなん・によわかうする時、互に心ひとつになり、一つかくとしやうするといふなり、かくておうなまつ一ねんゆとうのねんをほとこす時、もとの和合の心われ・人とてかわらす、た、虚空にへんまんしたる心なれとも、まよひぬる心によりて、まよふなり、このまよひの心、さとりの心ひとつになる時、ほんうちしやうの、りになるなり、このゑしんをすつるとき、ほんうのさとりのかうしやうたりしさとりの心になる、業平、此利益をほとこさんかために、まさに女に和合せしなり、されハ、われになれぬるよの人のくらきにゆかすとよまれたり、

〔校異〕

- 1 一 しんひたい三にいはく―(林・鉄) 深秘第三云 2 さとりの―(林) さとる 3 たかひにこく、しやうする―(林) たがひにきはめ、しやうする (鉄) 互極成する 4 手の指―(鉄) 手ゆ

ひ 5 女のー(林) 女〇 6 いつかくー(林) ひとさとり (鉄)
 一覚 7 かくー(鉄) 書 8 これハー(鉄) これ 9 なん・に
 よー(林) おとこ・おんな (鉄) 男女 10 する時ー(林) のとき
 (鉄) する 11 互に心ひとつになりー(林) たがひの心ひとつにな
 るとき (鉄) 互忍になる時 「忍」は「に(丹) 心」とも読め
 る。」 12 一つかくとしやうするといふなり、かくておうなまつ一
 ねんゆとうのねんをほとこす時ー(林) まよふ心さとのり心、一に
 なるとかく也。かくしてさきのごとく一ねんにむえんの念をほとこ
 すとき (鉄) まよひの心悟の心ひとつになり一覚に成すると云也
 かくて女先一念融同の念をほとこす時 13 もとのー(林) ナシ
 14 人としてかわらすー(林) 人のとくわがうす。 15 虚空にー(林)
 心 16 したるー(鉄) してる 17 なれともー(林) なれど 18
 まよひぬるー(林) まよへる 19 さとのり心ひとつになる時ー(林)
 さとのり心ひとつにしやうじ、(鉄) 悟の心ひとつに成時 20
 ほんうちしやうのー(林) 本有じしやうの (鉄) 本有の自性の 21
 りになるなりー(林) まぐはへてさとりになりてある (鉄) 理に成
 也 22 えしんー(鉄) 依身 23 すつるー(林) すてぬ 24 さと
 りのかうしやうたりしさとりのー(林) さとりにほどこす也。この
 とき、わがうしたりしさとりの (鉄) 覚の合成したりし覚の 25
 なる、業平ー(林) なる也。されば、なりひらは (鉄) なる也是秘
 の深秘也されは業平 26 ためにー(鉄) たためて 27 まさにー(林)
 かつぐ 28 せしー(林) する 29 されハー(林) このためをも
 て 30 くらきー(林) やみ 31 たりー(林) たる也

七、「深秘第四、悟りの時、和合であるから「迷ひ」もない…業平
 と染殿内侍」

一 しんひたい四にいはいく、此和合の時、まよふ心もさとのり心もひ
 とつに成て、まよひも一つなれハ、まよひもなきなり、されハ、し
 るもしらざるも、一つとなるなり、此ゆへに、業平の朝臣、うこん
 のは、のそめとの、ないしに、

みすもあらずみせぬ人のこひしくは

あやなくけふやなかめくらさん

此心ハ見るもミさるも一つなり、見ぬもみたりといふ心を、みすも
 あらずといふなり、されハ和合しそむるときをなかもむにハ、あや
 なしといふなり、へいし、そめとの、ないしうたの心は、まよひも
 さとりもいつれのしやへつありて、わきて、めいよといふへき、た、
 おもひのミこそしるへなりけれといふハ、さとのりのかたよりまよひ
 の人に和合して、一念かうしやうの時、さとのりのおもひをなすちふな
 り、なにかあやなし、おもひをしるへとおもひてあやありといふな
 り、あやとハやくなり、まよひもさとりも一つおもひをしるへにて
 ハあやあり、あやなしとハなにとていはんとなり、

〔校異〕

1 一 しんひたい四にいはいくー(林) 深秘第四云 (鉄) 深秘第四
 曰 2 まよふ心もさとのり心もひとつにー(林) まよふこ、ろもひ
 とつに (鉄) 迷心も覚心も一に 3 まよひも一つー(林) まよひ
 もさとりもひとつ (鉄) まよひも一 4 一つとなるなりー(林)
 一になりし、みぬもみざらぬも、一にしやうする也 5 うこんの
 は、のー(林) さこむ (鉄) 右近馬場の 6 ないしにー(林) な
 いしにあひて 7 こひしくはー(林) 恋しさに (鉄) 恋しきに
 8 此心ハー(林) ナシ 9 見るもミさるも一つー(林) みしもみ
 ざるもひとつ (鉄) みるもみさるも一 10 みたりー(鉄) みたる
 11 心をー(林) 心に (鉄) 心 12 みすもあらずとハー(林) み

ずもあらずと 13 されハ一(林)こひといふは 14 ときを一(林)とて 15 なかむにハ一(林・鉄)ながむるは 16 いふなり一(林)也 17 へいし一(林・鉄)返事 18 うたの心は、まよひもさとりも一(林)のうた、しるしらぬなにかあやなくわきていはむ思ひのみこそしるべ成けれ此哥の心は、まよひもさとりも(鉄)の哥心ハまよふも悟るも 19 いつれの一(林)なにか 20 めいよといふへき、た、おもひのミこそしるへなりけれといふハ一(林)まよひ・さとりと云べき。た、おもひのみこそしるべなりけれといふは(鉄)まよひ 21 さとりのかたより一(鉄)覚のかたよりも 22 まよひの人に一(林)まよふ人を 23 さとるおもひをなすちふなり、なにかあやなし一(林)さとる思ひこそしるべにてあれ、しるとしらざると二といふは、あやなし(鉄)さとる思ひをなすしるしらす何かあやなし 24 あやありと一(林)あやまりて 25 とハ一(林)といふは 26 やく一(林・鉄)益 27 まよひもさとりも一つおもひをしるへにてハあやあり、あやなしとハなにとていはんとなり一(林)まよひもさとりもおもふ思ひをしるべにて益あり。二とわきては益なしといふ也。(鉄)迷も悟もひとつ思ひをしるへにてあやありとわきてあやなしとはなにとていハむと也

八、〔深秘第五、無相無念とは…業平の齋宮への歌、義晴(滋春)

の業平葬儀の時の歌〕

一¹ しんひたい五にいはいはく、無相無念といふハ、無相ハ色もなく、² 無念はおもひもなきなり、三千世界ハ色也、しんしやう・心、是ミ³ なさ⁴とりの時ハ、無相無念にしてあるなり、さいくうのあまになりて、よを⁵のかれたるとおほせられし時、なりひらの朝臣、よみてた⁶てまつりけるうた、

そむくとて雲にハのらぬものなれと¹²

よのうき事そよそになるてふ¹³

此哥の心ハ、よをそむくといふてあまになりて山里にいたれとも、¹⁴ うきよの中なれハ、ふるまひハそむかぬよのなかにてあるなり、¹⁵ をそむくといふハ、世間に有なから、無念無相になるとき、そむか¹⁶れたるよのなかにてあるなり、無相無念ハ、虚空同體なり、空ハ色¹⁷もなし、されハ、虚空のことくして、無念無相なる時、よの中ハす¹⁸てられて、生死をいつるなり、此無相無念のさとりになりて、虚空¹⁹同體の時、生死ハなきなり、生死のなしといふハ、無念無相の伊勢²⁰のさとりなり、此故によしハる、おうとりのこうりにて、業平中將²¹の、さうけうの時よめる、²²

きのお見しすかたハ空にきえ果て²³

色もこ、ろもなくなりにけり²⁴

只今このゑしんをすてたるとき、まめやかにまことの無相無念にな²⁵りぬとよめるなり、²⁶

〔校異〕

1 一 しんひたい五にいはいはく一(林・鉄) 深秘第五云 2 なく
一(鉄) なし 3 無念は一(林) 無念といふは 4 おもひもなき
一(林) おもひなき 5 しんしやう・心一(林・鉄) 心性はこ、ろ
なり 6 さとりの一(林) さとる (鉄) 悟の 7 無相無念にし
て一(林) むねむにて 8 のかれたる一(林) のがれたり 9 お
ほせられし一(林) の給ひし 10 なりひらの朝臣一(鉄) 業平朝臣
11 よみてたてまつりける一(林) よみつかはし給ひける (鉄) よ
ミてたてまつり給ひける 12 のらぬ一(林・鉄) いらぬ 13 な
れと一(林・鉄) ゆへに 14 うき事そ一(林・鉄) うきことの 15
なるてふ一(鉄) 成らん 16 といふて一(林) とて (鉄) といひ

て 17 いたれとも一(鉄) みたるとも 18 ふるまひハ一(林) ふるまひ 19 そむかぬ一(林・鉄) そむかれぬ 20 よをそむくと
いふハ、世間に有なから、無念無相になるとき一(林) ナシ(鉄)
よをそむくと云は世間にありなから心無念無相に成時 21 無相無
念ハ、虚空同體なり、空ハ色もなし一(林) 雲といふはそらといふ
ぎなり。そらに入といふは、さとのむさうむねんは、こくうどう
たいになりて、こくうは無色無心也 (鉄) 無相無念ハ虚空同躰也
空ハ心も色もなし 22 無念無相一(林) むさうむねんに 23 生
死をいつるなり一(林) 生花を出る也。世中といふは生死也。 24
さとり一(鉄) 覺に 25 なりて一(林) なるとき、こくうどうた
い也 26 生死のなし一(林) 生死なし (鉄) 生死のなき 27 無
念無相一(林) むさうむねん 28 さとり一(鉄) 悟 29 よしハる
一(林・鉄) しげはる 30 おうとりのこくり一(林) おうとりぐん
(鉄) 大鳥部 31 業平中将の一(林) 業平の中将 32 さうけう一
(林) さうそ(鉄) さうめう 33 よめる一(林) 詠哥 (鉄) よ
めり 34 きえ果て一(林・鉄) なりはて、 35 只今この一(林)
このうた、さうそ(鉄) のつぎのひよめる也。さとの時、さとの心也。
むさうむねんは只今 36 ゑしん一(鉄) 依身 37 まことの一(鉄)
まことに 38 無相無念一(林) むねむむさう 39 よめるなり一
(林) 詠也

九、〔深秘第六、悟りの時、皆和合であるから善悪の区別はない〕
一 しんひたい六にいはいはく、此さとりをうる時、皆和合なれハ、よ
しあしのわかちもなきなり、善悪不二として、伊勢の一つ和合なる
なり、此故に世中のれいとして、おもハぬをハおもはぬものを、こ
の人ハおもふをもおもハぬをもけちめさせぬ心あり、業平のさとり

を顕ハす所なり、唯是和合なれば、神ハうけすとも、神のいさむる
みちならなくともいふなり、かゝるまよひの人の、さとりあるゆ
へに、悟を伝えて悟らしめんかためなり、伊勢物語とてかけるなり、
是も和歌の家ひしなり、

〔校異〕

1 一 しんひたい六にいはいはく一(林・鉄) 深秘第六云 2 此さ
とり一(林) この伊勢のさとり (鉄) 此伊勢の悟 3 よしあしの
一(林) 此和合に善悪の 4 わかち一(鉄) すち 5 善悪不二と
して一(林) 善悪不二にしてなり (鉄) 善悪不二にして 6 一つ
和合なるなり一(林・鉄) 一和合になる也 7 れい一(林) ためし
(鉄) 例 8 おもハぬをハおもはぬものを一(林) おもふを(お)
もひ思はぬをおもはず 9 あり一(林) ありといふ也 10 さと
り一(鉄) 悟 11 是一(林) この 12 とも一(林) とまながめ (鉄)
とても 13 かゝるまよひの人の、さとりあるゆへに一(林) この
和合は、かゝるまよひの人をすくふことほりのさとり、あがこのゆ
へに (鉄) かゝるまよひの人覚の有ゆへに 14 ためなり一(林・
鉄) ために 15 かける一(林) いへる 16 是も和歌の家ひしな
り一(林) この事は是家の秘事なり (鉄) これ和哥の家の秘事也

十、〔深秘第七、住吉大明神を血脈の始めとすること〕

一 しんひたい七にいはいはく、すよしの大明神をけつミやくのふに
はしめとする事、大明神といふハ、おほきに明かなるをいふなり、
神とハたましる心をいふなり、此人ハ、法界虚空を偏満してよく大
なり、此心ハ物をしり、悟りの有ゆへに、くらくなけれハ、明かな
るなり、一切の心を大明神といふなり、この人ハほんうしやうしゆ

の和合、無相無念なれハ、いとふへき事もなし、ねかふへき事もなし、とさとする時、よの中ハすみよしなるなり、さる間、すみよし大明神といふなり、このうへ、すみよしの社に参りたるに、巫につけてた²⁰くせんするといへるに、業平をほめていはく、なんしハ凡夫の愚人にあらすとのたまひしより、人業平をおそれしかハ、わざとすみよしの神のおしへによりてさ²⁵とるといふあやまりなき心をはしめとす、しかれハ、さ²⁹とる人ハ、わざとまよへる女に和合して、此ざとりを結ハせ、縁を結び置て、其人のあしんを捨るとき、悟りをえさせむとすへきなり、業平のほんるハ、伊勢のざとりをかきおきたる志のそみ、た、是よしハるかすいなりと云々、穴賢他人にみすへからず、可秘云云、

〔校異〕

1 一 しんひたい七にはくー(林・鉄) 深秘第七云 2 すみよしのー(鉄) 住吉 3 けつみやくのふにー(林) 血脈文 (鉄) 血脈の譜に 4 おほきにー(林) 大きに (鉄) 大に 5 心をいふなりー(林) なり、神の字を玉しめとよむ也 6 人ハー(林) こ、ろは (鉄) 心の 7 虚空をー(林) 虚空に 8 よく大なりー(林) おほいなり 9 しりー(林・鉄) する 10 悟りの有ゆへにー(林) かるがゆへに (鉄) 悟有故に 11 くらくー(鉄) 闇 12 明かなるなりー(林) あきらか也 (鉄) 明也 13 一切のー(林・鉄) この故に、一切の 14 人ー(林) 心 (鉄) 神 15 ほんうしやうしゆー(林・鉄) 本有常住 16 無相無念なれハー(林) むねむむさうにしてあるなり。されば仏ともいひ、衆生ともいひ、みなむねむ和合なれば (鉄) 無相無念の和合なれば 17 すみよしなるなりー(林) すみよくなる也 (鉄) 住吉なる也 18 すみよし大明神ー(林) すみよしの大明神 (鉄) 大明神 19 巫につけてー(林・鉄) 神、

禰宜につきて 20 たくせんー(林) 御たくせむ 21 なんしハ凡夫の愚人にあらすとのたまひしよりー(林) ナシ 22 人ー(林) 人々 23 おそれしかハー(林) 物へかれしかば 24 おしへー(鉄) 云をし 25 さとるー(鉄) 覚 26 いふー(林) いひて (鉄) 云 27 あやまりなき心をはしめとすー(林) 一代といふ也。あざけりなき心をはじめとしたれば、一代とをく也 (鉄) あやまちなき心をはしめとす 28 しかれハー(林) 然に (鉄) 然は 29 さとる人ハー(林) さとれる人の (鉄) 覚る人ハ 30 わさとまよへる女ー(林) わざとも、まよへぬ女 (鉄) わざともまよへる女 31 さとりー(鉄) 悟 32 其人ー(林) 雲人 33 あしんを捨るー(林) あしんをすつる (鉄) 依身をすつる 34 悟りー(林・鉄) このざとり 35 業平のー(林) これ、なりひらの 36 ほんるハー(林) 本意 37 さとりをー(鉄) 覚を 38 かきおきたる志ののそみー(林) いふをきき、つる心ざしの底これ也 (鉄) 書をきたる心ざしののそみ 39 た、是ー(林) 是 40 よしハるー(林・鉄) しげはる 41 と云々ー(林) ナシ (鉄) と云に 42 穴賢他人にみすへからず、可秘云云ー(林・鉄) ナシ

注

- (1) 『鉄心斎文庫蔵 伊勢物語古注釈叢刊 一二』 解題 片桐洋一 声 沢新二 八木書店 平成元年一月発行 五〇四一五〇五頁
- (2) 同注一 五〇六頁
- (3) 『謡曲集 上』 伊藤正義校注 新潮日本古典集成 新潮社 昭和五八年三月発行 一六五頁 頭注一七・一九
- (4) 『国書総目録』 第一巻 岩波書店 昭和三八年一月発行 二一六頁 第二段
- (5) 『伊勢物語古註釈の研究 増訂版』 大津有一著 八木書店 昭和六一年二月発行 三四頁

- (6) 同注5 三二頁
- (7) 『伊勢物語の研究(資料篇)』 片桐洋一著 明治書院 昭和四四年一月発行 八八〇頁
- (8) 同注5 三一―三四頁
- (9) 同注5 三三頁
- (10) 同注7 八八〇頁
- (11) 同注7 八八〇―八八一頁
- (12) 同注7
- (13) 『未刊国文古註釈大系 第八卷』 吉沢義則編纂 清文堂 昭和三年六月発行 昭和四四年復刻版発行 四二六頁
- (14) 同注1

補記

底本の翻刻を許可していただいた、刈谷市立図書館に感謝致します。
また、御高著所収の本を校異につけさせていただくことを許可いただきました、片桐洋一先生に感謝致します。飯塚は平成四年度・平成五年度の椋山女学園大学研究助成(B)を頂きました。これはこの助成金により、飯塚が行った読書会・調査の成果の一部となります。なお、データ入力を手伝っていただきました日本福祉大学学生の平沢真哉君に感謝致します。